

令和二年度

滝川第二中学校 入学検査 問題

B日程

国語

(五十分・百五十点)

注意事項

- 1 問題は1ページから18ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 検査番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 解答用紙の※印の欄には記入してはいけません。
- 6 計算機能付き腕時計・携帯電話の持ち込みは禁止です。
- 7 「終了」の合図で鉛筆を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

検査番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指示された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

私は長い間、哲学というものが、もっとシンプルで誰にでもできるものにならないかと思っていた。べつにいわゆる哲学の思想や問題を広く人に知ってもらいたいわけではない。物事をひっくり返したり、角度を変えてみたり、あれこれ考えるのは、それじたい楽しいことだ。きっと誰にとってもそうにちがいない！という勝手な確信があった。けれどもそれが具体的な形をとったらどのようなものになるのか、ずっと分からなかった。そうこうするうちにある時、「哲学対話」というものに出会って、自分の思いが一気に現実味を帯びてきた。

哲学対話というのは、5人から20人くらいで輪になって座り、一つのテーマについて、自由に話をしながら、いっしょに考えていくというものだ。

私をはじめて見たのは、2012年の夏、ハワイにおいてであった。「子どものための哲学 (Philosophy for Children)」というのを実践している現地の高校と小学校の授業に参加する機会に恵まれた。その時、子どもたちが真剣に考えながらも、うれ

しそうに笑っている様子を見て、^①何とも晴れやかな衝撃を受けた。そうだ、考えることは、一人でやっても楽しいけど、こうやってみんなやれば、もっと楽しいんだ！ だったら対話の場を作ればいい！

そういうわけで、以来いろんなところで哲学対話を行ってきた。大学で、学校で、地域コミュニティで、農村で。すると、ハワイで見た子どもたちと同じような表情に、うれしそうに考えている姿に、老若男女問わず、いたるところで出会った。

普通ものを考えている時、私たちはけっこう気難しい顔をしている。あまり楽しそうではない。むしろつらそうだったりする。ところが対話をしている時、多くの人は大人も子どもも楽しそうに目を輝かせ、時に眉間にしわを寄せながらも、とても満ち足りた表情を見せる——人が考えている姿っていいなあ。

そんな対話の光景を何度も目の当たりにするうち、分かったことがある。ここにはアメリカとか日本とか、子どもとか大人とか、男とか女とか、そんな区別なんてない。国籍も、年齢も、性別も、学歴も関係ない。みんな考えることが好きなんだ。考えることって楽しいんだ！——これは^②大きな発見だった。

けれども、もっと多くのことが分かってきた。まず、「考え

「〜ということがどうということか、人に問い、語り、人の話を聞くということがどうということか、私自身、はじめて分かった気がした。それとともに、自分の哲学についての理解も大きく変わった。哲学は、私にとって、かつてのように難解で漠然としたもの——であるがゆえにいつそう魅力的だった——ではなくなった。もっとシンプルで明快なものになった。

しかも、もっと大きな変化があった。「考える」ということを起点として、社会の中にあるいろんな問題が見えてきたのだ。しかもそれは、社会の限られたところにある特別な問題ではない。そこらじゅうにあつて、しばしば気づかないくらい私たちの内奥に食い込んでいることだ。それは「考えるつて楽しいね！」とか、哲学は好きな人だけやっていけばいいのだという、呑気な話ではない。もっともつとまずいことが起きている。

だから今、哲学者のおめでたい勝手な願望ではなく、あえて言うのだ。「哲学は誰にとつても、いつも必要なものだ」と。この入門書では、そうした誰にでも必要な哲学がどのようなものなのか説明していく。そうすることで、私たちがどのような問題を抱え、なぜ哲学が重要なのか、どうすればその問題を乗り越えられるのかということも分かるだろう。

「7歳からの哲学入門」と聞けば、小学生なら「7歳から」とか、中学生なら「13歳から」というのを想像するだろう。そういう本なら、難解な哲学思想について子どもにも分かるようにやさしく書きましたとか、若いキミに考えてほしい！ということをやアピールするにちがいない。

でもこの本は違う。「0歳から」の哲学入門である。あまりにも無謀だ。生まれたばかりでは、哲学どころか、そもそも本が読めないし、言葉も話せないではないか。なのに「0歳から」である。いったい何の冗談なのか。

もちろん生まれたばかりの赤ん坊にこの本を読んでほしいなどと乱暴なことは言わない。実際にこの本が読めるのは、中学生以上だろう。でも、「0歳から」というのは本気である。0歳の赤ん坊は、^③ じゅうぶん哲学に貢献できるからだ。

子どもは生まれた直後から、親だけでなく、大人を哲学的にしてくれる。生命の不思議、命の弱さと力強さを感じさせてくれる。社会性がまったく欠如した、いや、社会性を超えた存在として、私たちに常識の限界を知らしめてくれる。

圧倒的な弱さとかわいらしさによって、私たちが虜にし、どんなことがあつても守るべきものが何か、無償の愛の可能性が

どんなものなのかを教えてください。あるいは、放置できない存在として、親に義務と **a** の何たるかを問いかけ、厄介な重荷となつて、親を精神的にも **b** 的にも追い詰める。

そうやって私たちは、幼子からたえず問われ、試され、考えざるをえなくなる。自分という人間について、命の大切さと重苦しさについて、この世の規範と理不尽さについて。そうやって、私たちに問いかけ、哲学的な次元に引き入れてくれるという意味で、哲学は0歳から参加可能なのである。

他方、「1歳まで」と上限を決めている入門書も珍しいだろう。普通「入門書」というのは、何かを始める時に読むもので、だいたいその時期に焦点を当てていて、その後は「いつでもどうぞ」というところか。

(A) 本当にいつでもいいかどうかは疑問で、始めるには遅すぎる、というタイミングは、何となくでも考えられているのではないだろうか。そこで「1歳まで」と明記すれば、遅くてもこのころまでには始めてほしい、というメッセージになるだろう。

だから本書が「100歳まで」の哲学入門としているのは、100歳までには哲学を始めてほしい、あるいは100歳まで

やってほしい、と願っているということだ。文字通り100歳でなくてもいいのだが、いつ始めても遅くはない、生まれてから死ぬまで一生やってほしい、と言いたい。

年をとって物覚えも悪くなり、気力も衰えたのに、難しいことを考えるなんて勘弁してくれ!と思う人もいるだろう。

(A) 老いもまた、人を哲学的にしてくれる。命の終わり、人生のはかなさ、むなしさを痛感させてくれる。抗っても確実に病み衰え、次第に社会から疎外され、忘れ去られていく。

増え続ける **c** と減り続ける **d** の中で、自分の成し遂げたこと、やり残したことを振り返る。最終的に人生を意味づけるのは何か、残すべきものは何か、体が動かなくなり、自分自身さえも忘れて、なお生きる意味は何か。自分が、家族が、社会が問われ、試される——老いたからこそ考えなければならぬことがたくさんある。

そうした問いもまた、深い哲学的次元をもっている。しかもそれは、年離れた人たちだけが思い悩むべき問いではない。子どもも若い人も、考えるべき問いである。そういう意味で人は、老いて動けなくなり、まともに話せなくなったとしても、赤ん坊と同じように、哲学に参加できるのである。

思えば、哲学的な問いにまったく突き当たらない年齢など、あるのだろうか。人は生きていくかぎり、そういう問いに取り囲まれているのではないか。それをいったい誰が引き受けるのか。誰かに任せておいていいのか。

まずは当の本人が考えなければ、誰も考えてくれない問いがたくさんある。しかもそれはどれも、自分だけで考えるにはあまりにももったいない。どんな年齢の、どんな境遇きょうぐうの人の問いも、哲学的なことを考えさせてくれる。だから、哲学というのは、生きていくかぎり、いつでも誰にでも必要であり、始められる——それがこの本のスタンスである。

だが、一生すべての人に必要な哲学とは、どのようなものなのか。

普通「哲学」というと、むやみやたらと難解なもの、意味が分からないもの、面倒めんどうくさいもの、余計なもの、厄介なもの、などなど、おおむね評判がよろしくない。当たり前のことをわざわざややこしく考えるひねくれ者、^④アマノジャクの所業だと思いう人もいる。

好意的に見ても、この世界や人間について深い真理を探究するもので、そういうことに興味をもつ一部のスゴイ人、もしくは

へんな人を除けば、ほとんどの人には関係ない。多少の関心はあっても、自ら手を染めようとは思わないだろう。

かつては（そしてたいていは今でも）哲学が好きだとか、哲学を研究していると云えば、相手に困惑こんわくや反感を引き起こすか、さもなければ失笑しっしょうを買うのが、^⑤関の山せきのみやまだった。間違っても相手に歓迎かんげいされ、意気投合して仲良くなるなどという展開は、よほど幸運な例を除けばありえない。哲学好きな人には、そういう話ができる友だちなどおらず、一人で悶々もんもんとしているのが定番だ。「ねえ、幸福っていったい何だろうね？」とか「おい、存在するってどういうことだと思う？」などと友だちに聞けば、気味悪がられたり、からかわれたりするのがオチだ。クラスで浮くか沈しずむかして、居場所がなくなる。「カントが『純粹理性批判』の中でさあ……」とか「ニーチェが超人ちゆうじんの思想で言おうとしていたのはね……」なんて言おうものなら、後ずさりして離はなれていく友だちは、一人や二人ではないだろう。

親おやだったら大丈夫だいじょうぶかというのと、そんなことはまったくなくて、さらに危険だ。気味悪がられるのを通り越して、本気で心配されるにちがいない。「頭がおかしくなったんじゃないの？」とか「死んだりしないだろうね」とか。「この子は難しいことを考え

るのが好きなのね」と喜んでくれるとしたら、親のほうが相当な変わり者である。

結局、どこであろうと、哲学に興味があっても、下手にそれっぽいことは口にしないほうがいい。それが正しい処世術なのである。

そういう人でも、大学で哲学を専攻すれば、あるいは、哲学の授業に出れば、同じような人に出会えるかもしれない。そこで運よく仲間ができれば、哲学の話が思う存分できる。

でもそれは、変人が寄り集まってさらに変になっていく入口だったりする。(B) 実際、世の人のネガティブな印象を裏切らない人間になっていく(実際にはかなり普通の人も少なくな

い)。
結局、⑥ 世間から見れば、哲学というのは、ごく限られた物好きや変人がやる怪しげな所業にすぎないのだ。

けれどもこの本で取り上げようとする「哲学」は、そうした一般にイメージされる意味不明な話や日常からかけ離れた難解な思想のことではない。そういうのは、引き続きいわゆる哲学好きの輩に任せておけばいい。

むしろ最近、「哲学」のイメージが変わってきているように思

える。「哲学」という名を冠したイベントに興味をもってやってくる人が増えている気がする。

その一部は年配の男性で、かつて大学時代に哲学を学ぶか本を読むかして、退職後にもう一度学んでみようという人だ。そういう人は、分かって分かってなくても、哲学はいいものだと思っ

ている。分かったらうれいし、分からなかったら「やっぱり難しい！」と喜ぶ。気持ちだけでも青春に戻っているのだろう。

他にも、年齢にかかわらず、いわゆる思想好きな人たちは一定数いる。そういう人たちは、世の中にいろいろと出回っている読みやすい哲学書、入門書を読んだりすることが多い。そこから哲学者の著作に手を伸ばしている人もいる。こうしたもともと哲学好きな人がイベントに参加するのは、べつに不思議なことではない。根強いファンがいるのは、哲学を専門とする者にとってもありがたい。

(A)、かつてなら来ていなかったような類の人たちがたくさん参加している。とくに女性が多いが目立つ。年齢は20代から50代くらいまでだろうか。

彼女たちと話すと、たいがい「哲学って全然分からないんですけど」とか「哲学書なんてまったく読んだことがなくて」と前

置きをする。(B) 口をそろえて「何となく興味があつて」とか「何かいいなあと思つて」と続ける。

⑦ 哲学は元来、こんな無防備に近づいていいものではなかつた。もっとハードルが高いものだったはずだ。それを彼女たちは、あつさり乗り越える。

実際、哲学対話のイベントをすると、参加者の大半は、そういった「何となく」の人たちで、いわゆる哲学好きの人や哲学専攻の学生や研究者はむしろ少数派である。

また、学校で子どもたちを相手に哲学対話をする、「哲学つてムズカシそうだと思つたけど、面白かつた！」という感想を言ってくれる。

このように「哲学」そのもののイメージも実際に変わりつつあるようだが、哲学対話は、それだけで哲学のイメージを大きく刷新する可能性を秘めているようだ。

いったい何が変わったのだろうか。おそらくもっとも大きな違いは、かつての哲学はいわゆる「知識」として学ぶもの、(C)「哲学(philosophy)」という一つの専門分野だったのが、昨今では対話において自ら「体験」するもの、いわば「哲学する(philosophize)」になつてきていることだ。

「知識」ではない「体験」としての哲学とは、「考えること」そのものを指す。より厳密に言えば、「問い、考え、語ること」である。(B) 一人で考える時、私たちは自分に問いかけては答え、それを繰り返す。(C) 思考とは自分自身との「対話」なのだ。(B) 対話であれば、語る相手、(C)「聞く」人がいる。一人で考えている時、この聞き手は自分自身であるが、それは潜在的には他者である。

したがって「考えること」は、他の人との対話、「共に問い、考え、語り、聞くこと」であると言える。哲学とは、このようにごくありふれた、きわめて人間的な営みである。それは簡潔に「共に生きること」と言い換えてもいいだろう。互いに「問い、考え、語り、聞く」こと——そのような共に考える営みとしての哲学は、人が生まれた直後から始まり、^⑧まさに人と人が共に生きていくことそのものである。

(梶谷真司『考えるとはどういうことか——0歳から100歳までの哲学入門』より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。)

問一 (A) (C) に共通して入ることばとして適当なもの、次のア、エから選び、記号で答えなさい。

ア つまり

イ たとえば

ウ そして

エ しかし

問二 ——線部①「何とも晴れやかな衝撃」を感じたのはなぜですか。次の文の() にあてはまることばを、(ア) と(イ) は九字、(ウ) は十一字で本文中から書きぬきなさい。

哲学を(ア) にしたいと念願する筆者は、哲学は(イ) 楽しいものに違いないとの勝手な確信を持っていたところ、ハワイで哲学対話の実践に触れて、子どもたちが(ウ) のを見て自分の確信が決して勝手なものではないと感じたから。

問三 ——線部②「大きな発見」とはどういうことですか。その説明として、最も適当なものを次のア、エから選び、記号で答えなさい。

ア ハワイで見たような子どもたちの笑顔はふだん日本の子どもたちには見られないので、哲学対話にも環境が一番大事だと気づいたこと。

イ 国籍も性別も年齢も学歴も関係なく全ての人たちが考えることが好きなので、哲学対話はやっぱり楽しいことだとはつきり分かったこと。

ウ 分からなかった哲学の問題が分かったときの喜びは万人に共通なので、哲学を一人で難しく考えすぎていた自分を反省したということ。

エ 哲学をシンプルにする哲学対話は子どもたちにも取り組むことができるので、対話の場をつくと自主的に子どもたちは哲学を始めるということ。

問四 ——線部③「じゅうぶん哲学に貢献できる」と考えられる理由を、次の空欄に入るように、本文中から十五字で書きぬきなさい。

赤ん坊の存在が、私たちの考えを から。

問五 空欄 a に入る二字熟語の組み合わせとして

最も適切なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | a | 権利 | b | 肉体 | c | 未来 | d | 過去 |
| イ | a | 責任 | b | 身体 | c | 未来 | d | 過去 |
| ウ | a | 権利 | b | 身体 | c | 過去 | d | 未来 |
| エ | a | 責任 | b | 肉体 | c | 過去 | d | 未来 |

問六 ——線部④「アマノジャク」の意味として最も適当なものを、

次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|----------|
| ア | 根性がある | イ | 齒に衣を着せない |
| ウ | 性根がわるい | エ | 自分に正直な |

問七 ——線部⑤「関の山」と同じ意味になる、次の二つの類義

語の空欄 A・B に入る漢字一字を答えなさい。

A を出ない

B が知れる

問八 ——線部⑥で、「結局」から続けて「世間から見れば」と

いう言い方をしているのはなぜですか。その説明としてふさわしい部分を、「くから。」につながるように、本文中から三十二字で書きぬきなさい。

問九 ——線部⑦「哲学は元来、こんな無防備に近づいていいも

のではなかった」とあるが、これについて説明した次の文の（ ）にあてはまることばを、（ア）は四字、（イ）は十字、（ウ）は四字で本文中から書きぬきなさい。

近年、哲学の（ア）の変化とともに、元来哲学を専門的に研究してきた人に限らず（イ）が哲学の関連イベントに参加するようになってきており、一般の人が哲学に入る心理的な（ウ）が下がってきているといえる。

問十 —— 線部⑧ 「まさに人、人と人が共に生きていくこと、そのもの」について、筆者が「まさに」と強調するのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分一人だけで自分の内なる他者と対話することを本質とする哲学は、さみしくて孤独な悲劇的人間の営みであるから。

イ 人間的な共生の営みである哲学は、他者とともに「問い、考え、語り、聞く」ということ、つまり対話をその本質とするから。

ウ 人生の楽しみは他者とともに共有すべきものなので、哲学を自分だけで一人占めするのは申し訳ないと思っ

エ 対話の哲学は単独で実践できる人間的な営みではないので、一人だけで難しいことを考えるのはやめたほうがいいから。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指示された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

昨夜来、ざざ降りの激しい雨が続けている。

家の中は昼でもほの暗く何もできない。それをいいことに何もしない。雨降りもいいもんだ、と桃子さんは思っている。

この梅雨寒に厚手のカーディガンは手放せず、袖口を手の甲まで引き下げて腕を組み、窓にへばりついてさつきから目だけ上下動を繰り返している。

桃子さんが眺めているのは雨の滴、ガラス窓に打ち付けつると伝い窓の下枠に辿り着くまでを、飽きもせず目で追っている。ガラスに当たったとたんちりぢりにはねて跡形もなくなるものあれば、二筋三筋集まって大きな粒になって流れ下るもの、最後まで孤塁を守ってしずしずと消えるもの、見ていてこれで案外見飽きないのだった。柔毛突起ども皆鳴りをひそめ、暗闇に寄りかかって膝小僧を抱いていたり、腹這って頬杖をつきながら足をばたつかせたり、そうかと思えば、横向けに腕を枕にふて寝を決めこんだり、皆何も喋ろうとしない。そのうちの誰か音するような大あくびを発し、つられて桃子さん本体もああとあく

びともため息ともつかない奇声を上げた。

飽きないといっても飽きるのである。

桃子さん、組んだ両腕を振りほどき、ガラス窓にはあと息を吹きかけ、(あきた、ほとほと)と書いた。何よ、何に飽きたと誰かが問い、急いで、(雨)と一文字大書する。

ふん、生きでぐのがだべ、とほかの誰かが雑ぜ返し、聞こえぬふりをしてまた、(千年の雨)と書いてみる。千年降り続いた雨があるのだった。

ふあ、いづごろの話よ。

今から四十五億年前、地球ができてまもなくのころ。ドロドロのマグマが地表を覆っていた。そこに雨が降った、千年、千年もだぞ。

ああ、あぎっぺじえい。というか絶対にあきる。毎日毎日休みなく千年もが。

それで、海がでぎだ。あの海はこの時でぎだ。おらにも千年降り続く雨はある。

はあは、なにそれ。

おらの海は、

言いよどんだ桃子さんは、(もうすぐ来る)となぐり書きし

た。

電話、直美の電話、あの子から電話が来る。

桃子さんの顔に一瞬の戸惑いも見えたが、すぐに溢れる喜びがそれを打ち消した。

娘の電話ぐらいで大喜びする自分が照れくさくて無表情を装っていたのが、ここにきて堪え切れなくなっている。

近くに住んでいても電話一本寄越さなかつた娘がなぜ、でもうれし、うれしくてしょうがない。この日何度もしたように桃子さんはまた振り返って電話を眺めた。

二時を少し回ったころ、直美から電話があった。

「母さん、トイレトペーパーはある」

直美はのっけからこういった。笑いを含んだ穏やかな声に聞かされた。

「うん、まだ間に合ってる」

答える桃子さんの(A)は上ずっている。

「洗剤はどう」

「あ、まだ大丈夫。台所用も洗濯用もまだ大丈夫」

「牛乳は」

「二パックお願いしようかな」

「野菜はどう」

「大根とキャベツ半玉」

桃子さんは烈々の気合十分、打てば響くの心意気でさつと答える。

娘のどんな些細な声の調子も聞き逃すまい、その声にちゃんと応えたい、その気持ちばかりが先に立ってなんということのない会話に力が入る。

ヤレヤレ、口開けて待っている② ひな鳥のよでねが。逆の。口を開けているのが老いたる自分で、餌を持ってくるのが子供のほう。親と子逆転の構図。桃子さんを揶揄する内側の声、にわかにかまびすしくなってきたがそれは無視した。

実際こういう日が来るとは思わなかった。

あきらめかけていた直美とこうして話ができるのだ。知らず口元がほころぶ。

直美は車で二十分ほどのところに住んでいる。

ともに絵が好きで知り合って、今は中学校の美術教師をしている夫と小学生の息子と娘と四人で暮らしている。

結婚と同時に家を離れた直美といつごろから疎遠になった。

きつかけは何であったか思い出せない。仕方ないと思っていた。桃子さんと母もそうだったから。どういうわけなのだろう。直美と桃子さんに起きたことはいつも桃子さんと母に起きたことの忠実な複製なのだった。

その直美が孫娘のさやかを連れて実家を訪ねて来たのは、ほんの二か月ほど前である。

玄関先で直美の後ろにはにかんで隠れるさやかの大きくなったことに、桃子さんは先ずもってびっくりした。嬉々として家に招き入れる桃子さんの後ろで母親と手を繋いでおとなしい。小さいころの直美もこうだった。聞き分けが良くて、手がかからない子だった。その直美がまぶしくて桃子さんは目を合わせられない。

仏壇に手を合わせる横顔をようやく見て、桃子さんははつとしたのだった。娘に初めて老いを感じた。背中から肩のあたりひとまわり小さくなって無理もない、心で指を折ってもう四十過ぎなのだものと思った。流れる時に容赦はないのだった。桃子さん、自分の老いはさんざ見慣れている。だども娘の老いは見たくない。娘まではせて娘だけは勘弁してけでがんせというような手すり足すり③ 何かに頼む気持ちが生じ、その一方では、こうやって孫を連れて、さやかのようなかわいい孫を連れて現れた娘の歳

月を思つて涙なみだするといふか誇ほこらしいといふか、さまざまな思いが一挙に溢れて止まらなくなつたが、かろうじて平静を装つた。さやかのはやはやと慣れてきて母親のそばを離れ、部屋の中をあちこち見て回っている。桃子さんは少し気恥はずかしい。お兄ちゃん元気と尋ねると、食器棚たなを開けながら、うん、元気だよ。お兄ちゃんは絵えばかり描かいてると言つた。さやかのほうはずつと上手だもん。そのときだけ目を上げて、母親のほうをちらりと見た。直美は気づいたろうか。

母さん、買い物たいへんじゃない。持ち重りのするのだけでも私がやつてあげようか、と直美がにこやかに言つた。

近くのスーパーが閉店してからというもの、買い物カートを引きずつての夏のかんかん照りや、今日のような雨降りの日の買い物は正直たいへんだったから、桃子さんは娘の申し出がうれしかった。パートの休みの日に十日に一度ほど買い物を手伝つてもらうことがそこで決まつた。夢のようだった。

おばあちゃん、二階に行つてくるね。睡きびすを返したとき、さやかの今風のかわいらしいスカートがふわりと動いた。桃子さんはふと、こんなスカートを以前作つたことがあると思つた。

直美がちょうど今のさやかぐらいのとき、夜なべしてフリルの

いっぱい付いたスカートをそういえば縫ぬつた。ひらひらの中央に大きなリボンをつけて、自分でもかわいらしい出来だと思つた。直美は喜んで穿はいてくれたものと思つていたが、ずいぶん後になつて、あれが嫌だつたと、自分には似合っていないと分かつていながら無理やり着させられたと、涙ながらに詰なられたことがある。母さんは何でも思い通りにしたがる。まさかそんなつもりではと思つたが、一方では娘のころの④桃子さんの言い分そのもので、あれは堪こたえた。

【 I 】

【 II 】 万事滞とどりなく調べたと思つていたのに肝心かんしんの米を確かめるのを忘れていた。受話器を置いて急いで流しの下の米櫃こめびつを見ようとすると、いいよ、余分にあつても腐くさるもんじやないし、電話の向こうで笑いながら制止する。

【 III 】 直美の声はあくまでも優やさしかった。

その声を聞くと、桃子さんの感情が溢れた。なんてやさしんだべ、おらは母ちゃんにこれほどの言葉をかけたごどあつたべかあ。不意に今だ、今だと思つた。直美になんとしても言わなければならぬことがある。ここを逃したら二度と言えないこと、桃子さんがずっと考え続けてきたことを、今こそ娘に伝えたいと

思っただけだった。

だども、なにがら話せばいいんだが。桃子さんは口ごもった。かすれた声で、

「直美、あの……伝染るんだよ」

「え、母さんなんのこと」

⑤ 桃子さんは泣きそうになった。どう言えばいいのかわからない。

面と向かったら言えなくて、でも電話だったら冷静に話せるかと思っただけ、だいたい自分はいったい何を言いたいのか、伝染るんだということ、いやこんなことを言っただけ何も伝わらない。桃子さんが言いたいののは、なぜ桃子さんは桃子さんなのかということ、最も素朴で根源的なことなのだ。その桃子さんが桃子さんであったがために娘である直美にどう作用したのか、作用してしまっただけなのか。

桃子さんがずっと考え続けてきたことのひとつは実はこれなのだ。

考えるより先に、お申さ訳なかつたあ。言葉が飛び出していった。

済まなかつた。直美、おらは女の子であるおめはんへの接し方

が分がらなかつた。

母ちゃんは、母は勝気な人だった。いつも命令口調で自分の思い通りにならねば気の済まない人だった。桃子さんの強い味方であつたばつちやはすでに亡く、桃子さんはいつも母親の顔色を窺ってばかりいた。娘のころ、髪に刺したピン留めを色気づくと怒鳴られて引きちぎられたことがある。母は桃子さんが年相応に女らしくなるのを異常に恐れた。

何か損なわれると思っただけのようだった。これは後々まで崇つて、桃子さんは今でも自然な動作というのが苦手だ。自分の女の部分にどう向き合えばいいのかわからない。

素直に、というのが桃子さんにしてみれば一番困つたのだ。晴れの舞台に緊張して右手右足を同時に出して歩く小学生がいるけれど、桃子さんばかりはそれを笑えない。

直美にはそんな思いはさせない。とどうしてやればいいのか分がらなかつた。

結局、⑥ 自分のあこがれを娘に映すことしかできなかった。

フリルのいっばい付いたスカートは、小さいころの桃子さんの夢だつたのだ。

何のことはない、桃子さんが母に過剰にせき止められていた

ことを、過剰に与えようとしただけだったのかもしれない。期せずして桃子さんも娘を自分好みに思い通りに操ろうとしたのだ。

同じ。母から娘へ。娘からまたその娘へ。

なんだったってこうも似るもんだべ。伝染病のように。なぜ。そのことが桃子さんの関心のすべてだった時もある。調べだじえい。考えもしたんだ。ずいぶん心のうちを探索もしたのだ。桃子さんの心のうごめく有（B）無（B）、声を絞り出して語り始める。

分がったときのごどをおぼえでつか。おらはあの日のごどは忘れらんね。

⑦ 目に見えない仕組みがあるのだと分かった。おらはそれにま
んまに乗っかってしまった。

何にも知らなかった。無知は罪だ。おめだ、おらの悔しさが分
がつか。鼻水と涙でぐしょぐしょになりながらおらはこの部屋
で、革命だ、革命だと言って走り回った。

あの日のことは忘れられない、ああ、たしかに。したがそれを
どうやって直美に伝える。

桃子さんは戸惑う。

「母さん、あの」

電話の向こうで今度は直美が言いよんでいる。

「……急で悪いんだけど、あの……お金貸してくれない」

二つ返事でうんと言えればよかったのに咄嗟のことで躊躇した。

直美は胸に問えていたものを口に出したからなのか、あとは一
息に喋り出した。

「隆、絵の才能あると思うの。だから、都心の評判のいい絵画
教室に通わせて本格的に習わせたいの。入学金とか月謝、私の
パート代だけじゃ足りないの。ねえ、母さん貸してくれない」

「………」

すぐには答えられなかった。だが決してお金が惜しかったわけ
ではない。なぜだかさやか顔が浮かんだ。

「母さん、お願い」

「………」

電話の向こうの直美の息遣いが聞こえる。

沈黙がだんだん直美の感情を害していくようだった。受話器を
持つ手が震えた。

「なによ。お兄ちゃんだったら、すぐに貸してあげる癖に」

嫌な予感がした。話は桃子さんの一番触れてほしくない方向に
進んでいく。滝つぼに流れ落ちる急流のように、もうどうしよう

もない。唇を咬んだ。

「だから、おれおれ詐欺になんか引つかかるのよ」

「母さんはわたしのことなんか……」

耳元で大きな音で電話が途切れた。

耳に受話器を当てたまま桃子さんは呆然と立ち尽くした。

(若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。)

問一 —— 線部①「あきた、ほとほと」と書いたのはなぜですか。次の文の() にあてはまることばを、それぞれ九字で本文中から書きぬきなさい。

昨晚からの(ア)のために家の中で何もせずにいるのを、当初は「(イ)」と肯定的にとらえていたが、誰かの大きくびをきっかけにして、長雨は(ウ)やっぱり飽きるものだと思いなおしたから。

問二 (A) にあてはまる漢字一字を、本文中から書きぬきなさい。また、二か所ある(B)には「世にたくさんある、くだらないもの」という意味の四字熟語になるように、共通してあてはまる、漢字一字を答えなさい。

問三 —— 線部②「ひな鳥」が実際に指しているものを、本文中から探し六字で書きぬきなさい。

問四 —— 線部③「何かに頼む気持ち」が表している「桃子さん」の思いを本文中から十字で書きぬきなさい。

問五 —— 線部④「桃子さんの言い分」とは、具体的に何ですか。そのことが示されている部分を、本文中から十六字で書きぬきなさい。

問六 「Ⅰ」～「Ⅲ」に入る会話文として、最も適当な

組み合わせを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア Ⅰ 「急いで転びでもしたらそれこそたいへんなんだから。母さんは相変わらずせっかちなんだね」
Ⅱ 「あ、忘れてた、ごめん」
Ⅲ 「母さん、母さんたら、お米は大丈夫なの」
イ Ⅰ 「あ、忘れてた、ごめん」
Ⅱ 「母さん、母さんたら、お米は大丈夫なの」
Ⅲ 「急いで転びでもしたらそれこそたいへんなんだから。母さんは相変わらずせっかちなんだね」
ウ Ⅰ 「母さん、母さんたら、お米は大丈夫なの」
Ⅱ 「あ、忘れてた、ごめん」
Ⅲ 「急いで転びでもしたらそれこそたいへんなんだから。母さんは相変わらずせっかちなんだね」
エ Ⅰ 「急いで転びでもしたらそれこそたいへんなんだから。母さんは相変わらずせっかちなんだね」
Ⅱ 「母さん、母さんたら、お米は大丈夫なの」
Ⅲ 「あ、忘れてた、ごめん」

問七 ——線部⑤「桃子さんは泣きそうになった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア うまくいかなかった過去の娘との関係が、自分の母とのうまくいっていた関係に根差しているので、親にこびていた自分に自己嫌悪を感じたから。
イ 母と娘の関係について自分が経験してきたことを、それが最も素朴で根源的なことでありながら、自分の娘にうまく表現することばが見当たらなかったから。
ウ あまりにも自分の娘が今の自分に優しいので、過去のうまくなかった自分の母との関係を振り返って、母に申し訳ないと激しい後悔の念にとらわれたから。
エ 自分の病気が娘にも伝染してしまうということを娘に話す時、自分も母から病気をうつされたという秘密を娘に明かしてしまふことになるから。

問八 ——線部⑥「自分のあこがれを娘に映す」と同じことを言い換えた箇所を本文中から探し、十五字で書きぬきなさい。

問九 — 線部⑦「目に見えない仕組み」と同じことを言い換えたことばを、本文中から漢字三字で書きぬきなさい。

問十 最後の「桃子さん」と「直美」の電話のやり取りをふまえて、あなたは理想の家族のあり方をどのように考えますか、五十文字以内で書きなさい。ただし、文には主語を書き入れ、それぞれの文節の間に関係に注意して書きなさい。(次に練習用のマスがあるので、使いなさい。)

(練習用マス)

三 次の問いに答えなさい。

問一 次の漢字一字の表す国名を、それぞれカタカナ三字で答えなさい。

- (1) 独
- (2) 印
- (3) 加
- (4) 土
- (5) 秘

問二 次の四字熟語の空欄[A]～[J]にあてはまる漢字一字を、意味を参考にしてそれぞれ答えなさい。

- (1) 一[A]二[B] (よくなったり、わるくなったりすること)
- (2) 一[C]二[D] (一生に一度限りであること)
- (3) 一[E]二[F] (よいところもあれば、わるいところもあること)
- (4) 一[G]二[H] (わずかな期間)
- (5) 一[I]二[J] (ちよつとしたことば)

四 次の文の——線部と同じ意味・用法のものを、それぞれ後のア

ウから選び、記号で答えなさい。

- (1) 図書館の開館時間が変わります。
 - (2) 本はあまり読まないのか。
 - (3) あなたの好きな本は何ですか。
 - (4) 読んだのは何ですか。
 - (5) かが図書館委員長の佐藤君です。
- ア 読書友達の田中さんです。
- イ これはわたしの一番苦手な分野です。
- ウ できるだけ内容が軽いのを選びます。
- エ 図書館でいつも何をしているの。
- オ 本を大きな机の上に並べます。

五 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書

きなさい。

- (1) お寺のご住職が読経なさる。
- (2) 勉強不足が如実に表れる。
- (3) 忘れ物が多く何かと指図される。
- (4) 百周年で厳かな式典が行われた。
- (5) 努力を怠って将来苦労する。
- (6) 身のケツパクを裁判で主張する。
- (7) ピアノをエンソウする。
- (8) 船で太平洋をコウコウする。
- (9) 結婚式の司会をツトめる。
- (10) 銀行にお金をアズける。

